『はじめての海外で』

生物資源学部　資源循環学科　物質循環学講座　森林生物循環学研究室　3 年

2009 年 11 月 26 日朝、中部国際空港を出発した。機内で英語のアナウンスが流れるのを聞きつつ、窓から外を眺めると、日本が見えた。ああ、本当に海外に行くのだなという思いをひしひしと感じた。

今回、先生からタイ行きのお話を伺ったとき、確かに迷ったのだが、行きたいとおもった。本来積極的なほうではないし、勇気も全くないが、その時は好奇心のほうが勝っていたのだ。違う国を直に見てみたいとおもったし、社会勉強にもなりそうだと考えたからである。

そんなこんなでタイ行きは決まった。

○やっぱり熱帯だったタイ

左上：農業祭の展示にて巨大ナナフシ、左下：同祭の農場にて、右上・右下：観光施設にてランの花

バンコクで飛行機を乗り換え、チェンマイに着いたころには夜だった。チェンマイはタイ北部に位置する都市である。古くは首都として栄えた、寺院の多い美しい街だ。そんなチェンマイでまず感じたことは、熱いの一言に尽きる。チェンマイの 11 月末といえば、東京の夏か秋のはじめくらいの気温である。夜から早朝にかけては毛布が欲しいくらいに寒いのだが、それでも日中は半袖で十分なくらいだった。４月の一番熱いときには、明け方でさえ 24℃くらいであるという。正直、耐えられそうもない。

翌 27 日は山に調査器具の設置へ行った。標高も高く山岳ということで非常に涼しかった。何でも王族の方が避暑地に使うのだそうだ。納得である。

また、調査地に着くまでに車内から植生を眺めていたのだが、日本では見たことのないような植物が多くあった。特にプランテーションでポインセチアが群生しているのを見たときには、鉢植えしか見たことがなかったので一瞬何であるかの判別がつかなかった。

大学祭で見た野菜も虫も本当に大きくて、ナナフシなんか 20cm 以上あった気がする。とにかくなにかにつけスケールが大きくて、やはりタイは熱帯なのだなとしみじみおもった。

○ドリアンの破壊力

タイの料理は辛い。見るからに赤く辛そうなものもあれば、表面上何もないように見せかけているものもある。しかし一見安全そうなものに限って、赤や緑のトウガラシがこっそりと紛れ込んでいたりするので、油断できないのだ。勿論辛くない料理もたくさんあるのだが、私にはトウガラシがやたらと目についた記憶しかない。調査器具設置から戻って来たあと、タイの学生さんに「おいしいから、これは食べるべきよ」と勧められ昼にパッタイという料理を食べたのだが、すぐにジュースを飲みほすこととなった。タイのジュースはとても甘いのだが、このとき何で甘いのかが分かった気がする。

左上:「NO DURIAN」の看板、左下:果物市にて山積みのドリアン、右上:パッタイ、右下:ものすごく辛いソーセージ

また、あの果物の王様と呼ばれるドリアンを食べる機会にも恵まれた。11 月は旬ではなかったそうなのだが、スーパーでタイの先生が買ってくださったのである。見た目は濃いクリーム色をしており、なんだかおいしそうに見えた。先に食べた先輩が勧めるので私も食べてみたのだが、なんだかクリーミーな味と舌触りとともにむわっと独特のにおいがすぐに襲ってきた。本当に臭かった。もう味どころの話ではない。オフィスの職員さんには戸を閉められ、ホテルの玄関には「NO DURIAN」の看板があるくらいである。どうやら現地の人にも好き嫌いはあるらしい。ともかく、ドリアンはもう十分だという思いでいっぱいになった。

○物売りのこどもたち

食事中にやたらと物売りのこどもがそばによって来た。最初はなんだかよく分かっていなかったので、人懐こい子だなとおもっていた。しかし、よくよく見ると、手に花輪のようなものを持っており、主に観光客の席をまわり物売りをしている様子であった。夕食時であたりは暗い。こんな時間にこども一人で物売りをするのかとずいぶん驚いた。その後、いろんなところでそういったこどもをちょくちょく見かけるようになった。ある村に立ち寄ったときにはミサンガを持ってよってきたし、バンコクでは、車が信号待ちをしているときに窓をふきにきた。その時パンプレットを読んでいた私は、横で音がするなと思い外を見ると、こどもが手を合わせて何か言っており、ここでもとても驚いた。

邪険にするのは心苦しいものがあったが、おそらくひとり相手にし始めるときりがなくなってしまうだろうという気がした。あれも商売なので、買いたい人は買うのがいい。そのお金は彼らの生活の助けになるのだろうし、買った人は欲しいものが手に入る。要は買

う側の価値観だとおもうのだ。

あの子たちは学校に行っているのだろうか。普段はどんな生活をしているのだろうかと、車内でぼんやりと考えていた。なんだか、うっと胸にくるものがあった。今回の旅で考えさせられたことの一つであった。

〇コミュニケーションとはなんだろうか

海外といえば公用語の英語のことを考えるだろう。私は英語が大の苦手で、高校の頃は毎回のこと赤点を取りまくっていた。英語の教科担当には呆れられていた気さえするくらいである。今回のタイ行きに一番歯止めをかけていたのは、この英語に全く自信がないという点であった。しかし、現地ではそんなこと言っている暇はなく、必然的に話さざるを得ない環境におかれる。文章もうまく構成できないのに通じるものかと思っていたのだが、今回の旅で、ある程度までは何とかなるものだということが分かった。下手な文章よりも、いくつかの単語を並べた方が伝わりやすいのである。あとは表情や声の調子だ。相手をよく観察し、時には絵を描いて伝える。伝えるという手段は言葉だけではないのだなと、ひしひし感じた。今回は先生・先輩方がいらっしゃったので私はほとんど後ろに隠れていたのだが、飛行機内で余りにも寒く、もう耐えられんと、キャビンアテンダントさんに寒いから毛布くださいと片言で言ったら快く毛布を貸してくれた。本当に些細なことだが、通じたことにうれしさを感じた。言語に親しもうと考えるのはこういう些細なことから始まるのではないかとおもう。

左上：バンコクの川沿いの風景、左下：果物市、右上：ナイトバザールで踊る少女、右下：寺内の椅子でねむるネコ

もともと無口なほうであるし、コミュニケーションも下手だから今回は積極的に人とは話せなかったけれど、現地でお世話をしてくださった先生方を始め、皆すごく親切であった。ほんとうにそこは心から感謝したい。特に、進んで向こうのことを知ろうとすると、丁寧に教えてくれるし、向こうも嬉しいのだろうなと感じた。胸襟を開くのは怖いことかもしれないが、待つのではなくこちらから受け入れることが大事なのである。今回私にはその勇気が足りていなかったが、これからは心掛けたいことである。

○五感で勉強になる

タイには、日本とは異なる食事、気候、文化、宗教感などがある。どれ一つとっても全く同じものはなくて非常に面白みを感じた。また、どこか似ているものもところどころで見つけた。世界は広い。これは本当にそうだと思う。しかしまた、地理的に離れているのに、どこかでつながっていることを感じた。

今回の旅ではいろいろなものをみることができた。知ることは、自分中の世界を広げることに繋がることだとおもう。多くのいろいろなことを知る人は、そして、それを受け入れられる人は自分の器を大きくでき、人生を楽しく生きられるのだろうなと感じた旅であった。

チェンマイの寺院(左下のみバンコク)
右上:日本の狛犬にそっくりである

タイへ連れて行く機会をくださり、いろいろと知らないことを教えてくださった先生方と、なにかとご迷惑をおかけした先輩方、また、現地でお世話してくださった先生方とドライバーさん、タイの方々に心からの感謝を申し上げたい。本当にありがとうございました。

生きているうちに、またいろいろな所へ行ってみたいものである。